

六 花 2



俳句雑誌りっか
2017 (平成29年)
cover design Yuna Mizuno

山田六甲

石に眉

かん
間

黒板に二の字の一句雪の朝

契沖の紅の小指や初鏡

元日の耳から覚めて来たりけり

齒固めや噛んではならぬ齒にあたり

初読や串田孫一画文集

賀客待つあいさの永田耕衣集

初東風や手には取れねど播磨富士

寒月のこづゑを伝ひくる光

七種の雨七草の野づらかな

食ほそる猫みやうにしづかな松の明

きぶくれて寝て釜ゆでの刑の夢
大江山いくののみちの寒の水
指よりもまぶた悴みぬたりけり
日永かな米の炊けくるにほひして
銀幕や日永障子にひとの影
石に眉引けば仏や寒つばき
滝凍てて歯の根あはざる奥の院
鬼やらふたいまつ官幣大社かな

大山寺二句

椋鳥の発ちし大樹の日暮かな
庭園の四方に背を向け松手入
秋惜しむ渡り廊下のきしみにも
二人して香りの中を菊下ろす
うつし世をたまゆら遊べ雪螢
神渡し北北東へ雲流れ
落鮎の川瀬あかるき母郷かな
笑む夫の言葉待ちをり目短
八十路なるをみなを集ふ紅葉鮎
武蔵野の落葉に妹を訪ねけり

空罎を投げほうと鳴る秋の暮

善野 焔

あきびんをなげほうとなるあきのくれ ぜんの ろう

稲美野は菊花の空となりにけり

大菊のそろりそろりと降ろさるる

童胆へ身を寄せ人を通しけり

秋雨に須磨の汀の昂り来

空罎を投げほうと鳴る秋の暮

空罎を投げる。空罎は手を離れて回転しながら「ほう」と音を立てた。予想もなかった罎の音が生き物の声のように思えたであろう。手を離れた瞬間、無機質の空き罎に命が宿る。捨てた作者の分身のように寂しげで切ない声が誰そ彼の闇に消えて行った。空き罎を投げなければならぬ強い理由があったが、その感情を表に出さず客観的に詠んだのが佳い。

「秋の暮」とは、秋の一日の終わりや秋季の終わりの意でなく「秋の夕暮」。『新古今集』の三夕（さんせき）の歌あたりが「秋の夕暮」を固定させたという。既に暗くなりかけた時刻。

六甲

雪卿集

秋深し

志方 章子

日差しはまだ豊かなるとも秋深し
野点傘すこし斜めや初紅葉
百歳の宮の御薨去夕紅葉
そぞろ寒最終便の渡し舟
身じろげず秋夕焼けの消ゆるまで

犬の声

出口

誠

犬の声秋の夜空にひびきけり
山麓を真白に染めて冬の霧
冬の朝がれきの山とシヨベルカー
冬の夜肩まで風呂に沈めけり
こたつから出るきつかけのお客さん

雪卿集

菊

永田万年青

自転車の荷台に揺るる菊の花
砂利道を車椅子押し菊花展
懸崖の葉裏の菊を引き出しぬ
野路菊の白に心の合ひにけり
団栗の独楽倒れつつ回りをり

栗おこわ

松本文一郎

子ら招く金婚式や栗おこわ
小春かな店先さかる雑貨店
強霜やのらぼう菜畑白く染め
時雨るるや床屋の待ちは六番目
べつたら市気合に負けて買ひにけり

雪樹集

乳母車

赤松有馬守破天龍正義

露けしや野に置かれある乳母車
菊人形あとずさりして見てをりぬ
数珠玉や野坂昭如ノーリターン
立待や過去の人より現在の人
端正に菊の大輪咲かせあり

平目

田尻勝子

辻棲の合はぬ錠剤夜の長し
大寒の五枚おろしの平目かな
十二月日記の墓を造りたる
楡の間に冬日の正午を見上げけり
パン二つ食らうて秋は嫌ひです

雪樹集

松手入れ

住田千代子

石橋の上を散らかし松手入
片方の空晴れわたる松手入
子は影を追うてばかりよ後の月
雨含む方へ傾むく案山子かな
継ぎ接ぎの屋根の中なる菊花展

デ
ブ

溝
渕
弘
志

舟盛りの烏賊踊りをり旅の膳
具沢山の味噌汁を食み秋深し
生きてゐる真似してをりぬ案山子かな
マスキした応援席の選手かな
運動会一番デブが娘です

蛍雪譚

六甲選

二十九年二月号鑑賞と随想

俳句は極限まで削る職人技というか、芸が求められている。座の文芸と言われたのは、連句の時代のこと。今は俳句として、一句独立、完結している必要がある。

句会や吟行会で刺激を受けながら、嘗々と句を詠む。毎日何句か決めて詠むのもいいが、気の向くまま詠むのが長続きする。初学の間は季語を探す、沢山詠む。ある程度進むと手帖を持たずに、近辺を歩いて来て、観たこと感じたことを思い出して俳句にする。その散歩の前に題を決めて歩くのもいい。自分で楽しめるよう工夫をする。その方法は欲張らないこと。一句だけ材料を見つけたら、見つけた物を何度も口に唱えながら帰ること。出来た句を家人に示し第三者の反応をみるのも方法。

椋鳥の発ちし大樹の日暮かな

笹村 政子

椋鳥は群れをなして移動する。大きな樹で賑やかに過ごしていた椋鳥の喧噪が飛び去って、一気に静かになったのは、大群で峙へと帰って行ったからなのである。その喧噪に包まれていた大樹には静かに夜のとばりが下りようとしている。ぽっかり穴の開いたような大樹だから静寂も静寂も大きい。「椋鳥の」から始まって「日暮れかな」と結ぶ格調もいい。

六りっ花か集しゅう



江見 巖

佐助や腰掛けとなる力石
湯豆腐や過去と未来の間なり
ガードマン勤労感謝の日にも立つ
人力車もみじ客のせ走り去る
飛び跳ねる小石の波紋草もみじ

大内 幸子

冬の蝶陽が恋しくて陽溜りへ
居ながらに霧の中から駅放送
身仕度に手間どる齡冬に入る
木枯の一号雨戸叩きけり
陽表へ冬の目高は群なして

善野 焔

稲美野は菊花の空となりけり
大菊のそろりそろりと降ろさるる
竜胆へ身を寄せ人を通しけり
秋雨に須磨の汀の昂り来
空罌を投げほうと鳴る秋の暮

小林はじめ

遠山に虹懸かりたる峽夕
雪婆を好むも忌むも人の性
枯園の佇まいにも雅趣のあり
風呂吹を口で転がし冷ましけり
冠雪に初を冠して賞でにけり

平居 滢子

朱の幟街にはためく暮の秋
抜け穴の闇に秋日の差し込みぬ
散り急ぐ枝垂桜の紅葉かな
積み上がる引つ越しの荷に秋深む
秋思かな奥付夫の蔵書印

篠原 敬信

懸崖の菊は芝生に流れけり
堂々の厚物咲も支へ有り
のじぎくの一むら白き日暮れ道
白菊は日陰の中で尚白し
秋の海憂ひ忘れる釣師かな